論点も視点も広げ、「西海」を詳述

陶磁器、天然痘、潜伏キリシタン 新型コロナ、ハンセン病も見据え

長崎大教授の野上さんと大学院生賈さん

長崎大教授（考古学）の野上建紀さん（61）と、同大院生の賈文夢さん（28）が「『西海』の海域交流誌―多文化の海、交差する技術・疫病・信仰」を刊行した。東シナ海に面した長崎県西部地域を中心に、陶磁器だけでなく天然痘、潜伏キリシタンまで論点を広げ、その延長線に新型コロナのパンデミック、そして差別問題を視野に入れるなど現代を照射した一冊だ。

陶磁器の海外流通の研究で知られる野上さんだが、前職は佐賀県有田町の職員として地域の焼き物の研究をしていた。同大赴任後の2016年から長崎・五島で「五島焼」を調べており、今回の著書はその調査がベースとなった。

磁器生産技術の流出を制限した佐賀藩に対し、波佐見焼の産地を抱える大村藩はゆるやかだった。これに磁器の原料となる熊本・天草産の陶石の流通も合わさり、五島も含めた現在の長崎県西岸、天草で磁器生産が行われるようになった。第1章でこの詳細を記し、第2章では天然痘で亡くなった人を埋葬した「疱瘡墓」を取り上げる。第3章の「潜伏キリシタン」へとつなぎ、終章の「周縁海域の交流」にまとめた。

陶磁器と天然痘、潜伏キリシタンと、直接の関係はないものを扱うことになったきっかけは、新型コロナが流行していた2020年に長崎県波佐見町で行った調査だった。

棚田や窯業集落などで国の文化的景観への選定を受けることを目指して同町から委託されたもので、「昔の地籍図を見ると山の中にポツン、ポツンと墓地がある。現地に行ってみるとそれが天然痘で亡くなった人を埋葬した疱瘡墓でした」と野上さん。「人と接触し難い、一般社会と離れた山奥・海岸・離島に存在する」ため、〝密〟とは無縁な場所で、少人数で調べることができ、コロナ下の調査としてやりやすかった。墓からは陶磁器も出土。陶磁器の流通を研究する目的で留学してきた賈さんの修士論文のテーマは疱瘡墓になり、第2章の共著者として名を連ねた。

調査を進めると「疱瘡墓は潜伏キリシタンの集落や墓のエリアに重なっていた」ことにも気付く。一般的に潜伏キリシタンは弾圧を逃れて五島に渡り、そこでも迫害を受け、苦しい生活を強いられたとされる。しかし、本書で記される彼らの実像は少し違う。

まず、五島側に求められて移住した。最初は耕す土地があった。ただ、土地には限りがあり、移住者が増えるにつれ、その環境は劣悪化していく。〈先住者である「地下」との摩擦も生じ、移住者はさらに奥まった土地へと移り住んでいった。その結果（中略）疱瘡患者の隔離地にまで居住地を求めていった〉。摩擦の原因は信仰だけでなく、言葉、習俗の違いもあった。「そして排除される人たちの空間が重なったんです」と野上さんは言う。

分析には、日本史、歴史学や民俗学者の研究を参照し、天然痘対策を詳しく残す熊本・天草の「上田家文書」などの史料にも直接あたった。考古学に偏らない、人文科学系の他の分野の手法を取り入れたことが本書の特徴だ。野上さんは「文献と合わせると具体的な内容が見える。考古学の論文という形ではなかなか難しい内容で、むしろこういう一般向けのスタイルの本だから書けた」と語る。

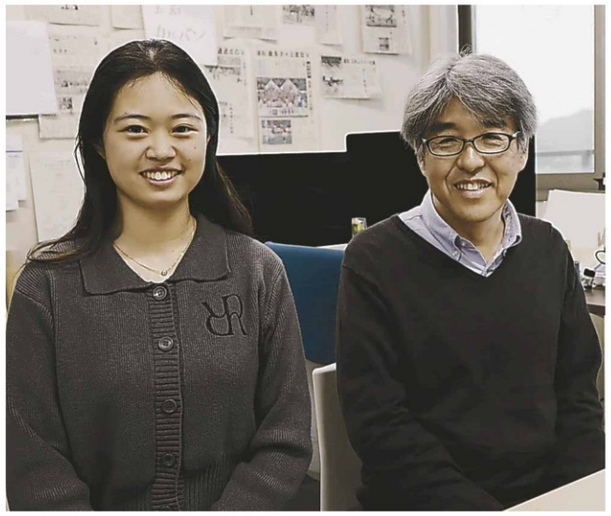
□ □

〈天然痘患者を排除する無痘地の政策は（中略）「ゼロコロナ」政策とも重なって見える〉〈近現代においても同じように（中略）差別されたまま死後も専用の墓地に埋葬された人々がハンセン病罹患者である〉。そう書いたように、テーマは現在社会の問題に直接つながっていた。

日本の端である「西海」の調査を通じて見えてきた地域の特性は「排他性」と「包容力」だ。「今扱っているのは技術、疾病、信仰だけなので、他のものを入れれば、もっと具体的になる」と野上さん。現代日本社会の縮図ともいえる西海の地域社会のさらなる解明も期待したい。

（古賀英毅）

「『西海』の海域交流誌」刊行



「『西海』の海域交流誌」を執筆した長崎大の野上建紀教授（右）と大学院生の賈文夢さん

◇『西海』の海域交流誌」は雄山閣刊、4180円。

(C)西日本新聞社　無断転載、複製及び頒布を禁止します。